



ピッポ新聞

2013
4
No.267

編集・発行 子どもの本専門店ピッポ&ピッポ古書クラブ
編集者 伊藤倭男

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

スイスへいつてきたよ (その5)

フライトホルン登頂へ

おどろいたことに、その中の一人は日本人の夫妻だった。あと一人がミカエルという、スイスの青年だ。ガイドとぼくを入れて、きょうはこの五人でパーティーを組むのだ。

M氏夫妻は、五十代半ばの年齢のようだ。予期せず日本人といっしょになったことで、ガイドとの意思疎通がらくになると、胸をなでおろしたものだ。実際この後、M氏に大いに助けられたのである。

目指すはフライトホルンの雪



出発時間の八

時前だったが、ガイドは出発を告げた。今日はロープウエーを乗り継いで一気に富士山より高い三千八百八十二メートルのクラインマッターホルン(現在はマッターホルン・グレンシャー・パラダイスと呼ばれるようだ

が、ここでは以前の呼び名のクライン・マッターホルンを使う。なお、クラインとは小さなという意味)まで行き、そこから四千六百六十四メートルのフライトホルンを目指すのだ。

登る高度差は二百八十一メートルとたいしたことはないのだが、これまで富士山の三千七百七十六メートルがぼくの経験した最高到達点だから、未知の四千メートルは楽しみでもあり、不安でもある。

事前に調べたところ、この山の通常ルートは雪稜でクレパスや、ロッククライミングなどもないアルプスの四千メートル峰の中では一番やさしいということであった。そのため、はじめの計画ではガイドレスで登るつもりだったが、日本で山岳保険に入るときの条件が、予定している山すべてにガイド同行という条件が付けられていたのだから従って、ガイド登山にしたのだ。まあ、これはぼくの年齢からくる条件なのだろうがない。

途中ロープウエーのなかでちょっとしたムーングがあった。というのはこのクラインマッターホルンは夏でもスキーやスノーボードのできる場所としても有名だが、これを目指すスイスの少年少女(中学生ぐらい)、たちと乗り合わせだ。若者というのはどの国でもそうだと思うが、仲間と群れるとテンションが上がるのは珍しいことではない。この彼らもそうだった。

ロープウエーの中で悪ふざけをしていたのだが、大型のロープウエーに乗り換えたところ、その床に寝そべるといって傍若無人の振る舞いに及んだ

のである。さつきから苦々しく思っていた、わがガイド氏が、とつとつかれらを怒鳴りつけた。さらに係を連れてきて、これ以上騒ぐとロープウエーから降ろすと宣言したのだった。さすがに少年少女はシュンとして以降おとなしくなった。この一連のやり取りは、すべてドイツ語なので内容は多くの想像にすぎないのですがね。

感心したのは、この若者たちのはた迷惑な行為を諫めたガイド氏（スイスの大人）の態度である。若者たちにとって、知らない大人に真剣に叱られるという経験のちに生きてくるのではないだろうか。いまや日本ではこつこつ光景はすっかり影をひそめた感がある。こつこつ場合、ぼくをふくめて日本の大人は見えて見ぬふりということが大方だろう。

それぞれの文化もちがうことだから、スイスと日本を単純に比較することが必ずしも良いと思わないが、この時のガイド氏に拍手を送りたい気もちだった。

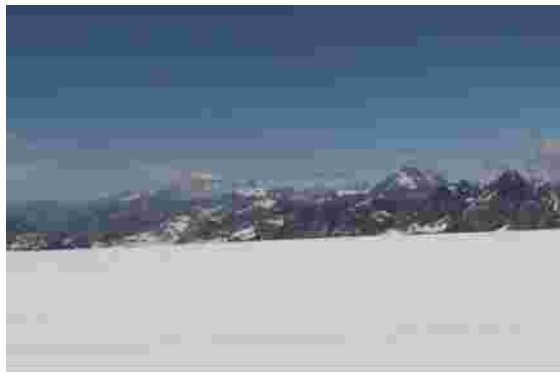
なぜこれが印象に残ったかという点、続けて起こったハプニングも、その対処の仕方に日本との違いを感じたからだだった。

乗っていたゴンドラは終点に到着したのだが一向にドアが開かない。おかしいとおもっていたところ、出口側の窓が外側から開かれ、外側と内側に踏み台が置かれた。くだんの若者たちが真つ先に窓を乗り越えて飛び出していった。続いて、ぼくら一般の客も順番にそこから外に出た。感心したのは、その対処の素早さだった。窓を開き、そこから客をだすというところをおそらく

一分もかからずに判断したことである。まだ朝早い便で、その多くが登山やスキー客であったから、窓を乗り越えて外にできることなど何でもない客たちばかりであったが、日本でも同じことが起こったとしたら、果たしてこのような素早い判断がなされたであろうかと、考えたのである。もっとも、こんなことはちよくちよくおこることなので、案外慣れているのかもしれないけどね。

アンザインして一歩を踏み出す

左の遠くの方がモンブラン

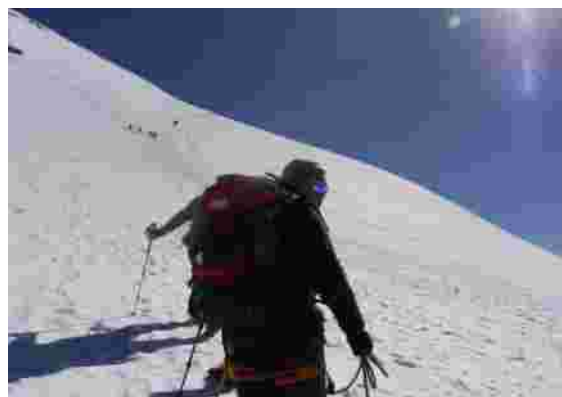


ロープウエーを降りたところから長いトンネルを歩き、

そこをぬけると、目の前には雪原が広がっていた。すぐ左手には、これから目指すブライイトホルンの雪稜がそびえ、右手には遠い山並みが連なっていた。さらにその右にはマッターホルンが見える。ガイド氏はその遠くに見える山並みの一つを指さしモンブランだと教えてくれた。

その雪原を五分ほど歩いたところでガイド氏は停まり、肩に斜めに掛けていたロープを外して

ここからアンザインパーティーを一本のロープで結びことしていくと伝えてきた。それぞれザックからハーネスを出して装着し始めた。ところが、



ぼくはなかなかハーネスがつけられない。これまで渓流釣りで使っていたハーネスとつけ方が違うので、家で練習してきたのだが、本番の場でまごついてしまった。痺れを切らしたガイドが見かねて手伝ってくれた。ぼくのハーネス

先頭に行くガイド氏。この先でトリーヌはカストールとブライイトホルンにわかれる。にはすでに自分のカラビナを通してあったが、ガイド氏はこれを外して、自身の腰からはずしたカラビナにつけ替えた。これはどういふことかと思っただ、基本的なところは自分（ガイド）の信頼できる用具を使っただなと理解した。

ガイドは、だいたい五メートル間隔くらいにロープをダブルタイトノット（二重八の字結び）で結んでカラビナに通した。順番は先頭がガイドで二番手がM氏の奥さん、三番手がM氏、四番手がぼくでラストがミカエル君という順番だ。片手でストックをもって、もう片方でロープを



右は頂上についてへたりこんだのか？左はわがガイド氏で、ポリュックスやカストール方向を指さして、山の名前をおしえてくれる

ンを装着するといつ。ついでに水や行動食、チョーシートなどをとりたければとつてもよいといつ。

もち、あまりたるませたり引つ張られたりしないで歩くようにと注意があった。こういふことはM氏がみんな通訳してくれる。

午前八時五〇分、

こうして、ブライトホルンに向けて第一歩を踏み出した。しばらくはロープが気になって、歩きにくかったが、それも歩を重ねるにつれてなれてきた。ゆるやかな登りの広い雪原を行くと、トレースは左と右に分かれた。右側はカストール方向、左のトレースがブライトホルンに登っていくよつだ。

二〇分ほど歩いたところで、ガイド氏は停まった。M氏はまた通訳をしてくれた。ここでアイゼ

周りをみると、ほかのパーティーもここでアイゼンをつけている。

雪の上に腰を下ろして、アイゼンを装着しようとするのだが、登山靴の新調に合わせてアイゼンも新調したせいで、アイゼンのネジの調整がうまくいっておらず、左足はなんとかとりつけたが、右足はバネが硬くてどうしても引き起すことができない。またしてもガイド氏が見かねて手伝ってくれた。これだから新しい道具は嫌いなんだ、などと自分の不備を道具のせいにして内心で毒づいた。

準備を整え再び歩きだした。雪のトレースは少しずつ傾斜を強めていった。天気の良いおかげで上を見上げると、はるか遠くすでに頂上付近を上っているパーティーが見える。道は大きく蛇行しながら高度を上げていく。方向が変わるたびに、ロープとストックを持つ手を入れ替える。

ガイド氏のペースはお願ひしたようにゆっくりだったので、あまり息苦しさを感ずることなくついて行くことができる。しかし、ガイド氏はまったく休む気配はないので、こちららはロープの間隔を気にしながら、適当に立ち止まって、大きく息を吸ったりしていた。

高度がだいぶ高くなってきたよつだ。登頂を果たして下山してくるパーティーと途中ですれ違つよつになった。少し足の運びが重く感じ、ストックを持つ腕が痛くなつてはきていたが、このペースなら後一時間は登り続けても大丈夫だななどと妙な自信もわいてきた。

片側が切れ落ちた斜面が二百メートルほど続



やっぱりマッターホルンをバックに撮りたいよね。でも、ここからのマッターホルンの形はだいぶ違うね。頂上から自分が登ってきた下を見れば、下山するパーティーと、これから登頂するパーティーが豆粒のよつに見える。

いた。ぼくらの前には「組ほどのパーティー」がとどまっていた。彼らを追い越して少し進んだら、ガイド氏がいきなり「congratulation」といって、握手を求めてきた。ぼくは頂上はまだ先だと思つていたので、「is this summit?」聞いてしまった。ガイドは「oh yes」と言った。周りをよく見ればこれ以上の登りの斜面はなく、雪面は先で切れ落ちているのだった。そこでぼくも「thank you」とガイドの手を握り返したのだった。こうして、思つていたよりもずーとずーと簡単に、最初の四千メートル峰の頂上に立つことができた。

たまたま恵まれ

ていたのかもしれないが、それは風もなく、雲といえは常に頭上にあるものだと思うだろうが、今ニニフライトホルンのてっぺんは、雲は眼下にあり、頭上には靑空が一面広がっている。

しばらくは絶景を楽しみ、それからお互い写真を撮りあった。次々に登ってくるパーティーも同じように景色を楽しんだり、写真を撮っている。「いついつ時どいつしても探してしまつのが、マッターホルンの姿だが、ここからのそれは、下から見上げるといつより、どつれつに見えるので、ツェルマットから見える形とはちがう思ったほど映えないと感じた。ぼくは日本の山でもそうだが、キザっぽく言つと、黙って、景色と対話するのが好きだ。

一〇分ほど経つたところで、ガイド氏が下山を告げた。次から次に登山者が来るので比較的広い頂上(幅四メートル、長さ五十メートルくらいかな)だが、入れ替わりに下山するようだ。



今度は、登つたときとは逆にミカエル君が先頭でぼくが二番手で最後がガイド氏という順番で下

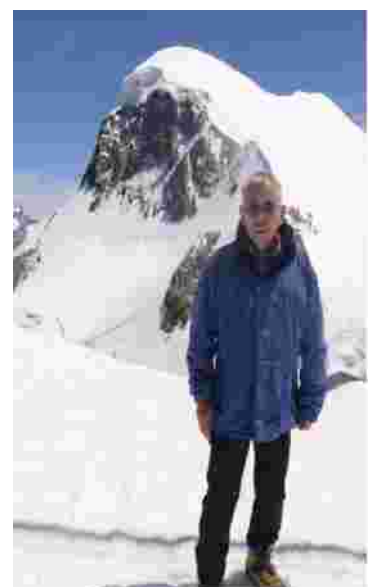
る。途中、登ってくるパーティーとすれ違つのに時間がかかるので、ガイド氏はミカエル君に雪の斜面のトレースを外して歩くことを指示した。それからはすれ違いに時間をとられることなく、ミカエル君のペースも上がり、どんどん下ることができた。

三〇分ぐらい下ると、急斜面から緩斜面に変わってきた。ガイド氏から、「ここでアイゼンを外すと指示があった。アイゼンを外し終わると、ロープはまだつけたまま、ここからは再び先頭をガイド氏が歩き、そのあとをM氏の奥さんという来た時の順番に戻して歩いた。

ここからは雪原歩きなので、M氏と話しながら歩いた。話題になったのが、ガイド氏に渡すチップのことだ。ぼくがどのくらいさしあげるのですか」と聞くと、M氏は「妻と二人分で一〇フランを考えている」という。ぼくは「世話をかけたのでニニフランを渡そうと思う」といった。

ロープウエーの入口がみえてきたところで、ガイドはアンザイレンを解き、そこで、昨日ガイド組合で渡されたパウチャーの半券を回収した。その時チップのニニフランも渡した。

そしたら、ガイドは「サンキュー」と言いながら、「これでビールが飲めると」言つて喜んでいたら、これを聞いたM氏が「さかさ、あまり飲みすぎでメタボには気をつけろよ」と、冗談を言った。そつなのだ、わがガイドのフルノ氏はどう見てもメタボなのだ。ぼくなどはひそかに、このガイドはもはやマッターホルンのガイドはできないだろうつなと思つていたのである。



下山し、ほっとして、フライトホルンをバックに記念撮影。M氏に撮ってもらつた。

ここでガイド氏とは別れた。彼は長いロープを後ろに引きずりながら、それを巻きながら歩いて去つて行った。

いつして、登頂に二時間、下山に一時間一〇分という登山としては短時間だったが、とにかく初めての四千メートル峰の登山は無事終了した。雪面にザックをおろし、くつろいだ気分、M氏と奥さんと話しながら写真を撮りあった。

さて、明日はマッターホルンの登山拠点ヘルンリ小屋までハイキングの予定だ。(続く)

守ろう！子ども 九条いのち

日時 五月十八日(土)午後一時半～四時半
国立オリンピック記念靑少年総合センター大ホール
子どもの本 九条の会五周年の集い
当日は澤地久枝さんの講演「逆風つてなに?」など
予定 参加券 前売り八〇〇円

安倍自民党政権の改憲と原発再稼働の策動に
断固反対！ ぼくも参加します！